平成13年（2001年）6月1日毎月1回1日発行　協力東映／東映ビデオ／NHK

Kyoto Hollywood News
京都ハリウッド通信

平安京の闇を司る「陰陽師」待望の映像化
右利き社会の平安京で左利きの役者が四苦八苦

昨今、陰陽道と、陰陽師・安倍晴明が女性の間でブームとなっている。その火付け役となったのが、夢枕獏のベストセラー小説「陰陽師」。その「陰陽師」をNHKが、稲垣吾郎主演でテレビドラマ化した。

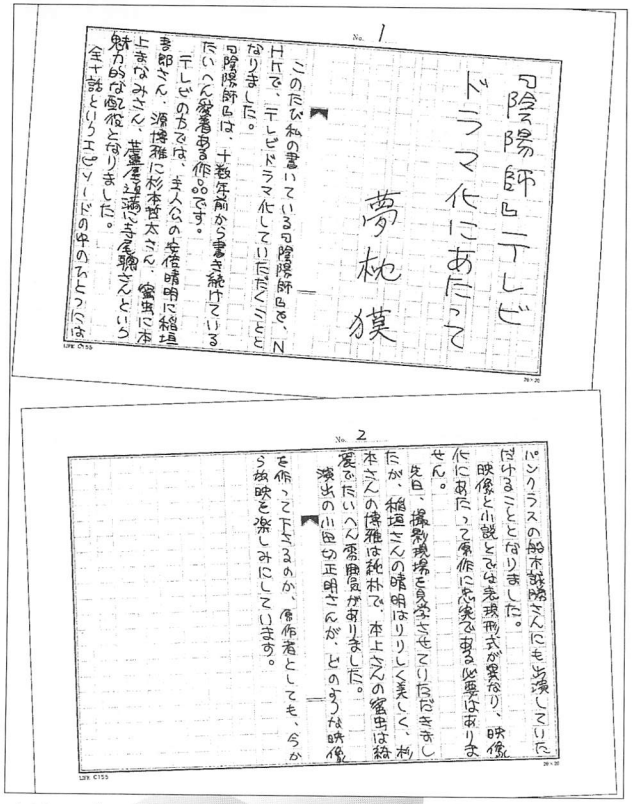
そもそも陰陽道とは何か？　そして安倍晴明とは何者か？　方位だけの風水と違って陰陽道とは吉凶を判断し、時日方角を選定、様々な禁忌を設け祭祓作法（まつりはらえのさほう）を総合的に執り行うもので、中国より伝来した。平安朝には朝廷が官庁の一つとして陰陽寮を設ける程に隆盛を極めた。その陰陽寮に仕え、陰陽師の頂点を極めたのが希代の天才陰陽師・安倍晴明である。

晴明は占術、呪術に卓越した能力を発揮し、「式神」という鬼の一種を使役し、京の都に現れる怨霊や悪鬼に陰陽術で立ち向かったという。暦の作成、天文の観測も陰陽師の仕事で、貴族たちは陰陽師の説く陰陽道の禁忌、占術に縛られた生活を送った。

ドラマでは、晴明を稲垣吾郎が演じ、晴明の親友・源博雅を杉本哲太、晴明が操る式神・蜜虫を本上まなみが各々演じている。今回のドラマ化に際して困ったのが所作。平安時代の所作に関しての資料は少なく、所作指導も着物を着た動きを基本に行われた。所作指導を担当した西川扇新之輔（にしかわせんしんのすけ）氏は、「台詞やテンポ、内容など、脚本は現代的なので、所作の面で厳しくし過ぎると視聴者が戸惑ってしまうので、自然な動きを壊さない、流れを止めない事」を心掛けたそうだ。さて、西川扇新之輔氏によれば平安の頃はあらゆる物が右利き向けの、「右手の世界」なのだが、困った事に稲垣吾郎も杉本哲太も左利きで、二人とも慣れるまで苦労したとか。それでも不意に左手を出してしまう事も少なくなく、「どうしても」という事柄でなければ、細かい事で自然に左手が出てもキャラクターに合わせてもらえばいいという事になったという。放映はNHK総合で毎週火曜、午後11時より。全10話を放送終了後、衛星第二テレビ「衛星ドラマ劇場」でも放映が予定されている。

晴明（稲垣吾郎・左）と博雅（杉本哲太）は平安京に巣くう魔物に立ち向かう

これがドラマ化にあたって書かれた、ファン垂涎の夢枕獏先生直筆の原稿。温かい容貌と人柄が偲ばれる文字だ



No. 1

「陰陽師」テレビドラマ化にあたって

夢枕獏

このたび私の書いている「陰陽師」を、NHKで、テレビドラマ化していただくことになりました。

「陰陽師」は、十数年前から書き続けている時代小説です。

テレビの方では、主人公の安倍晴明に稲垣吾郎さん、源博雅に杉本哲太さん、蜜虫に本上まなみさん、葛葉に高橋恭子さんという魅力的な配役となりました。

全十話というエピソードの中のひとつには、パンクラスの船木誠勝さんにも出演していただけることとなりました。

映像と小説とでは表現形式が異なり、映像化にあたって原作に忠実である必要はありません。

先日、撮影現場を見学させていただきましたが、稲垣さんの晴明はりりしく美しく、杉本さんの博雅は純朴で、本上さんの蜜虫は愛らしいへん雰囲気がありました。

撮影の三田村正明さんが、どのような映像を作ってくださるのか、原作者としても、今から放映を楽しみにしています。

史実の中の安倍晴明

９２１年に生まれ、１００５年に没したという以外に、虚実がないまぜとなり、その実像は謎に満ちている。陰陽道という神秘な術を司ったため、数多くの不思議な伝承が伝えられている。その中でも有名なのは「晴明蛙を殺す事」だろう。

晴明が嵯峨野・広沢の池付近にある真言密教の高僧・広沢僧正の住まいに伺った折り、若い僧たちが呪術で人を殺せるのかと聞いた。そして庭の蛙を呪術で殺してみてくれと頼んだ。とうとう断り切れなくなった晴明は、草の葉を摘まんで呪文を唱え、蛙に投げ付けた。すると草の葉が乗った途端、蛙は無残に潰れて死んでしまったという。

一条戻り橋に晴明は式神を隠していたといわれ、その近くにある晴明神社は創建時、晴明の没後、晴明屋敷跡に建てられた。現在は晴明ファンの女性が参拝に訪れる晴明ファンのメッカとなっている。

撮影最高潮「赤影」&レアヴィジュアル満載！元祖「赤影」の基礎知識

3月7日に東映京都撮影所で行われた記者会見での、中野監督と出演者の面々。左から中野監督、村上淳（青影）、麻生久美子（飛鳥）、安藤政信（赤影）、奥菜恵、竹中直人（白影）

赤い仮面はカラーテレビ普及の秘密兵器だった？

東映京都撮影所で行われている忍者ムービー「赤影」の撮影も最高潮。今月はそのルーツと今回の作品との違いを徹底検証！　まず、元祖「仮面の忍者　赤影」を解説する前に、東映の「大忍術映画　ワタリ」という映画を紹介しておかなければならない。'66年に東映京都撮影所で製作されたこの作品は「カムイ伝」「サスケ」など忍者コミックの第一人者・白土三平が原作で、アニメではなく特撮を駆使し、実写娯楽忍者アクション映画として完成。公開と同時に大きな話題となり、大ヒットを記録した。

その当時、家庭のテレビはまだ白黒が大半で、カラーテレビは高価で珍しい存在だった。そんな折り、カラーテレビの普及にカラー番組の製作の必要性を考えた三洋電機は、「ワタリ」に着目。そのテレビドラマ化が検討される。

こうして「ワタリ」は関西テレビで放映が決定し、準備が進められるが諸般の事情により中止。しかし放映枠が決まった後なので、かわりの番組を製作しなければならないため、東映は忍者コミック「伊賀の影丸」でヒットを飛ばしていた横山光輝に原作を依頼。カラー番組を考慮して、色を効果的に使用してほしいという三洋電機サイドの要望を受けて、「仮面の忍者　赤影」が考案された。

「赤影」は「飛騨の赤影」として少年サンデーで先行連載され、'67年より「仮面の忍者赤影」としてテレビ放映が開始された。「赤影」も「ワタリ」同様アニメではなく、特撮を駆使した痛快娯楽忍者ドラマで、「金目教編」「卍党編」「根来編」「魔風編」の4部、全52話を放映。抜群の面白さで高視聴率を記録し、大ブームを巻き起こした。

赤影を坂口徹郎、青影を金子吉延、白影を牧冬吉が演じ、青影が鼻の前に手を広げて言う「大丈夫」は流行語となった。

ストーリー

1545年、時は戦乱の世。戦国大名が戦いに明け暮れていた頃、彼らに仕える忍者たちもまた、死闘を繰り広げていた。影一族と呼ばれる忍者集団もまた、その一つである。ある日、影一族の赤影、青影、白影、飛鳥たちに「京極城の地下に眠る新式兵器を偵察せよ」という任務が下る。しかし京極城は根来忍軍と呼ばれる強力な忍者集団に警護されていた。案の定、根来忍者と赤影達との間に、壮絶なバトルが勃発する。しかし多勢に無勢、赤影達の状況は次第に悪化していく‥‥。

今も見られる幸せ往年の名作品の数々

「仮面の忍者　赤影」

販売・東映ビデオ

赤影のヘアースタイルは、当時としては現代的でファッショナブルなものだったワケだが、これは実はカツラだったのだ。人間の髪の毛では上手くセット出来ないので、赤熊の毛を脱色して染め上げた物。しかも胸の辺りの毛でしか作れないとかで、現在なら百万円は下らない高価な物だという。東映ビデオよりリリースされ、全国ビデオレンタル店で好評レンタル中。

「仮面の忍者　赤影」

レコードジャケット

赤影といえば往年を知る世代にとっては軽快なテンポの主題歌も魅力の一つだ。作曲は小川寛興で大ヒットした。当時、作曲したデモテープを東映のプロデューサーが関西テレビの企画会議に持って行き聞かせたところ「古すぎる。もっと現代感覚の音楽に手直ししてほしい」と言われ、東映のプロデューサーがその旨を小川氏に伝えると、小川氏は「天下の小川寛興がこれでいいと言ってるんだから、これでいいと言ってきなさい！」と手直しに応じず、仕方なく関西テレビに報告すると「よく聞くといい歌だね」という意見も出て、なんとか決定したという伝説がある。

●金目教編

豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎だった頃、琵琶湖の南に金目教という怪しい宗教が流行っていた。それを信じない者は恐ろしい祟りに見舞われるという。藤吉郎は金目教の秘密を探るため、赤影を呼んだ。金目教の教祖・甲賀幻妖斎は、実は霞谷七人衆を操る甲賀五十三家頭領で、得意の催眠術で民衆を扇動し、足利将軍を倒して天下を掌中に得んと目論んでいたのだった。

●卍党編

織田信長が活躍した頃、海を渡って来た奇怪な妖術者の群れが、ギヤマンの鐘を求めて各地を襲撃した。世界制覇を狙う卍党の仕業である。ギヤマンの鐘には強烈なエネルギーの製法が秘められていた。平和を願う信長は、卍党の野望の粉砕を赤影に命じた。

●根来編

悪大将・夕里弾正の反乱を知った織田信長は、居城清州から小人数を率いて弾正制圧のため京の都へ急いだ。しかし、その道筋には弾正に味方する根来の忍者が、恐ろしい怪獣を操って待ち構えていた。道中の無事を願う信長は、警護に赤影を呼んだ。

●魔風編

飛騨の国、影一族に伝わる黄金の仮面は、あらゆる忍者にとって憧れの的、栄光のシンボルであった。そしてまた、仮面には莫大な黄金のありかを知る謎が秘められていたのだった。この仮面を奪い、忍者の王座を狙う者が現れた。怪忍獣を使う魔風雷丸である。黄金の仮面を巡って、赤影率いる影一族と魔風忍軍との死闘が繰り広げられた。

「大忍術映画　ワタリ」

販売・東映ビデオ

これが赤影の元になったという白土三平原作の作品。戦国時代、伊賀の里では百地三太夫を頭とする百地党と、藤林長門を頭とする藤林党が争っていた。その最中、少年天才忍者ワタリが現れて活躍、伊賀の里に平和を取り戻すまでを、特撮を駆使して描く。東映ビデオよりリリース、全国ビデオレンタル店で好評レンタル中。

今月の言葉

小説も一段落し、現在は舞台の準備に大忙し。キャストやスタッフの人選から劇場の手配までと、やらなければならない事は、それこそ山のよう。そんな最中に町内会の会長に選ばれてしまい、普段近所付き合いの少ない小生には分からない事ばかりで、仕事以上に町内行事の段取りに時間を費やす今日この頃。

2001年6月1日
山田誠二

責任編集人　山田誠二

1963年生まれ。京都を拠点に、映画のプロデュース、脚本、評論の他、コミック原作など多方面で活躍の作家。映画関連著作多数執筆。